

ハリー・ポッターは「生きた少年」？ —英文法を考える（２）情報価値

清水 啓子（英語学・言語学）

平成18年度に担当した「日英語翻訳演習」の授業の中で、ハリー・ポッターの原書を日本語に訳す、という課題に取り組んだ。第1巻第1章は次のような表現で終わっている。

(1) “To Harry Potter—the boy who lived!”

これをほとんどすべての学生が、次のような日本語に訳してきた。

(2) 「生きた少年、ハリーポッターに乾杯！」

プロの翻訳家ではないのだからといくら甘くみても、この「生きた少年」という表現は極めて奇妙であり、日本語として不自然である。

本稿では、なぜ「生きた少年」が不自然な日本語であるのかという問題を、日本語だけに限ったことではなく、英語にも同様にあてはまる、広く言語一般に関わる現象として考察することにしたい。

まず次のような英語表現を考えてみよう。

(3) a. # The house was built.

b. The house was built last year.

(4) a. # a built house

b. a recently built house

それぞれ a の表現の前に (#) マークが付いているのは、何か特別な文脈がない限り不自然であり意味をなさないと言語母語話者が判断する、平たく言えばあまり良くないと判断するような表現であることを示している。一方、b のように (3) では last year、(4) では recently を付け加えることで、意味の通る申し分のない英語表現になる。これはどうしてなのだろうか。また、(3) a の動詞を build から destroy に変えて、次のような文にすると良い英語になる。

(5) The house was destroyed.

この場合は、last year も何もなくとも構わない。なぜ destroy では良くて build

ではだめなのだろうか。

たいていの場合、文が伝える内容は「前提」と「新情報」に分けられる。「前提」とはすでに了承済みの分かっている内容で、それに付け加えるのが「新情報」である。文の中のどの部分が前提でどの部分が新情報であるかは、「Lie テスト(うそテスト)」をすると判明する。

(6) A: This house was built in 1992.

B: That's a lie! It was built in 1972.

B': That's a lie! # It was not built.

(7) A: この家は1992年に建てられました。

B: ウソだ! (それは) 1972年に建てられたんだ。

B': ウソだ! (それは) # 建てられてはいない。

(6) の英語、(7) の日本語それぞれの B' からわかるように、「建てられた」ことは「前提」ですでに事実としてわかっていることなので、ウソとして指摘することはできない。しかし B から明らかのように、「1992年に」という時期はウソの対象になり、したがって A の文が伝えようとしている「新情報」であるということがわかる。もし in 1992 を取ってしまつて This house was built. という「新情報」が何もなくなってしまうのである。

目の前のある家を指差して this house といった場合、その家がそこに存在するということは、だれかがその家をすでに「建てた」から存在するのであって、まだ建てられていなかったら、そもそもその家は「存在しない」のであり、存在していない家を指差して this house と言うこともできない。つまり this house という言語表現の意味の中には「建てられた (was built)」という情報が暗に含まれているのである。したがって、わざわざ This house was built. と言っても was built には何の情報価値もないのだ。しかし、This house was built in 1992/last year. のように建てられた時期を付け加えれば、それが新情報となり、文として情報価値を持つことになる。一方、This house was destroyed. であれば、目の前の家を見ただけでは was destroyed (かつて一度破壊された) かどうかは予測の付く内容ではないので情報価値を持ち、自然な表現となる。

(4) の # a built house と a recently built house のように、過去分詞が形容詞として使われる場合も同様に説明できる。a house は build されたから存在するのであるから、わざわざ built と言われなくても a house で事足りる。

同じような例として (8) をみてみよう。

(8) a. # a made cake

b. # This cake was made.

c. This cake was microwaved.

目の前にケーキがあるなら、それは誰かに作られたから存在するのだから、わざわざ made (作られた) というのは意味がない。しかし、(8) c のように、microwaved (電子レンジで作った) といってどの様に作られたかを詳細に説明するのであれば情報として意味を持つ。

このように言語表現の良し悪しの判断には、文法形式だけでなく、情報価値の有無が関わってくるのである。アメリカの言語哲学者グライスは、会話の含意を解釈するメカニズムとして、4つの「会話の公準 (Maxim of Conversation)」を導入した。その一つが「量の公準 (Maxim of Quantity)」であり、以下のような内容である。

(9) 量の公準：

- ・(会話の場面での目的に合わせて) 必要とされている情報をすべて与えなさい。
- ・必要以上の情報は与えてはいけない。

つまり「必要」なことだけを言いなさい、「言わずもがな」ならわざわざ言うことはない、ということである。the house も the cake もその名詞句が表す意味内容のなかに「建てられた」「作られた」という意味が前提として含まれているので、あえて受身文にして The house was built. The cake was made. と言うのは言語表現の無駄遣い、ということだ。

但し、ここで一つ断っておかなくてはならない。文は使う場面によってニュアンスが変わり、強調される焦点も変わることがありえる。次の (10) は、主語の HOUSE がアクセントをおかれて強く発音されると考えてほしい。

(10) The HOUSE was built (not the garage).

この場合は、この文より前の文脈で、house (家) と garage (車庫) の二つが話題にのぼっており、そのどちらが建てられたのかが問題であったり、誰かが間違えて garage が建てられたと言ったりした場面であれば、(10) は「(車庫ではなく) 家の方が建てられたのだ」という意味を伝えることになり、情報価値のあ

る発話になる。

(9) にあげたグライスの「量の公準」は文脈に埋め込まれた発話の解釈に関する規範であるので、(10) のような例もうまく説明できる。注意すべきは、一つの文それだけをにらんでいても、それが文法的に正しいかが決定できない言語現象もあり、背景となっている文脈も考慮しなければならない、という点である。

このグライスの公準が、英語表現に全般的に応用できるということを、他の構文で確認してみよう。まずは「中間構文 (middle construction)」から。

(11) This book sells well. (この本は良く売れる)

sell という動詞は他動詞として、The shop sells all kinds of books. というように、「だれか (主語) が何か (目的語) を売る」という出来事を表す。しかし (11) では「だれか」ではなく「売られる物」が主語になっている。この中間構文という形式は、「主語で指示されている物が、それ固有の何らかの特性を持つゆえに (だれでも) ～することができる」という内容を表す。つまり主語で指示された物がどんなものを説明している構文である。では次の例を考えてみよう。

(12) a. # The car drives.

b. The car drives easily/smoothly/like a boat.

なぜ a の中間構文がだめで、b は良いのだろうか。一般的に car (自動車) は、drive (運転) することを目的として製造されている。であるから、a のように「その車は運転できる」と言われても、自動車に当然期待される機能を述べているだけなので、情報価値はない。一方 b のように drive easily/smoothly/like a boat (簡単に/滑るように/まるでボートのように運転できる) ということは、その自動車に特有の優れた性能ゆえに普通レベル以上に快適に運転できる、という情報を伝えているので意味のある言語表現となる。一般的に中間構文では、動詞の後に well や easily などの副詞表現が必要と言われている。しかし先ほど指摘したように、文はそれだけで判断するのではなく、文脈の中で解釈するものであるから、例えば、車検の切れた100年以上前のクラシックカーに乗ってみて、(12) a のように This car DRIVES! (この車、まだ走るよ!) と言うことには何の問題もない。さらに、

(13) This table folds up. (このテーブルはたためます)

の場合も、easily などの副詞は何もないが、これは主語の table という物に対して

私たちは一般的にそれを fold up (たたむ) ものとは考えないので、「たたむことができるテーブル」という情報は easily (簡単に) などの副詞がなくても十分な情報量を持つためごく自然な表現となるのである。table を私たちはどの様な目的でどの様に扱うかという一般的な知識フレーム (frame) が重要な役割を果たしている。

次に「同属目的語構文 (cognate object construction)」をみてみよう。典型的な例文は以下のようなもの。

- (14) a. Mary lived a happy life.
b. John dreamed a scary dream.

動詞 (live/dream) と同じような内容を示す名詞句 (a life/a dream) を目的語にとる構文である。しかしながら、(14) の目的語名詞句から形容詞 (happy/scary) を取り除いて (15) のようにすると、非常に不自然な英語になってしまう。

- (15) a. # Mary lived a life.
b. # John dreamed a dream.

この不自然さも、先のグライスの「量の公準」で説明される。live という動詞は当然 a life を生きることを意味し、動詞 dream でも夢に見るのは当然 a dream のはずであり、それぞれの目的語 (a life/a dream) は動詞 (live/dream) の意味に何の情報も付け加えていない。どの様な life/dream であるのかを説明するような形容詞 (happy/scary) が必要なのである。

この稿の冒頭では、# a built house のように動詞の過去分詞を形容詞として使った例を問題にしたが、動詞ではなく名詞に-ed をつけた形容詞もある。この類の形容詞は以下のような振る舞いをする。

- (16) a. a red-headed boy, a big-headed boy, a four-headed dragon
b. # a headed boy
(17) a. a blue-eyed girl, a one-eyed man
b. # an eyed man
(18) a. a two-legged dog, a four-legged robot
b. # a two-legged man

(16) a のように「髪が赤い」「頭が大きい」「頭がよつつある」というのは重要な意味を持つ。一方、boy と言えば人間であろうから頭があるのは当然なので、(16) b の a headed boy は意味がない。また人間であれば目があるはずなので

(17) b の an eyed man における形容詞 eyed は情報価値がない。しかし (17) a のように one-eyed であつたり blue-eyed ならどの様な目かという付加情報があり有意味となる。同じことは日本語にも当てはまる。

(19) a. 茶色い目をした女の子

b. # 目をした女の子

(20) a. 3本足の犬

b. # 4本足の犬

ここまでいろいろ見てきた表現の不自然さは、どれもグライスの公理によって説明がつく。「必要とされる情報を与えよ」という量の公理に違反しているので、その表現の容認性が低くなってしまふのである。つまり、前提としてすでに当然の事柄とわかりきっている内容をことさらに言葉で表してもコミュニケーションは成立しない、ということである。

さて、ハリー・ポッターである。問題の箇所を以下に繰り返す。

(1) “To Harry Potter—the boy who lived!”

後半の the boy who lived に対する日本語訳が「生きた少年」では不自然である、という問題であった。関係代名詞を使った名詞句なので、話を簡単にするために (21) のように普通の文構造にしておこう。

(21) The boy lived.

この英文の場合も、the boy という定冠詞 (the) 付きの boy (ある特定の少年) は現に存在しているはずであり、存在している少年ならば「生きている／生きていた」ことは確実に前提として含まれる。一瞬たりとも生きたことのない「少年」は想像上の少年以外には存在しえない。したがって (21) の述部 lived だけでは情報価値がない (The house was built. と理由はまったく同じ。違うのは一方は建て物で、こちらは生物 (boy) ということ)。本来ならば、次のように何らかの補部や修飾語句が必要である。

(22) a. The boy lived an active life.

b. The boy lived happily ever after.

c. The boy lived in peace and quiet.

しかし、ではなぜハリー・ポッターは副詞無しの the boy who lived でよいのであろうか。ここでまた重要な役割を果たしているのは文脈である。このハリー・

を伝えることができる。

翻訳という作業を通して日本語と英語を比較してみると、両言語の差異に気づくと同時に、両言語の共通性も見えてくる。そして人間の言語というのはよく出来ているものだとはたと感心してしまうのであるが、そう感じているのは果たして筆者だけなのか…。

主要参考文献：

池上嘉彦 2006 『英語の感覚・日本語の感覚—〈ことばの意味〉のしくみ』(NHK ブックス1066) 日本放送出版協会

トマス, ジェニー 1998 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版

Ackerman, Farrell and Adele E. Goldberg. 1996. Constraints on adjectival past participles. *Conceptual structure, discourse, and language*, ed. by Adele E. Goldberg. CSLI. 17-30.
Goldberg, Adele E. and Farrell Ackerman. 2001. The Pragmatics of obligatory adjuncts. *Language*. 77-4. 798-814.

出典：

Harry Potter and the Sorcerer's Stone, by J. K. Rowling. Arthur A. Levine Books. 1997.
(翻訳『ハリー・ポッターと賢者の石』松岡佑子訳 静山社)

(本学准教授)